

## 京都市における食中毒の状況

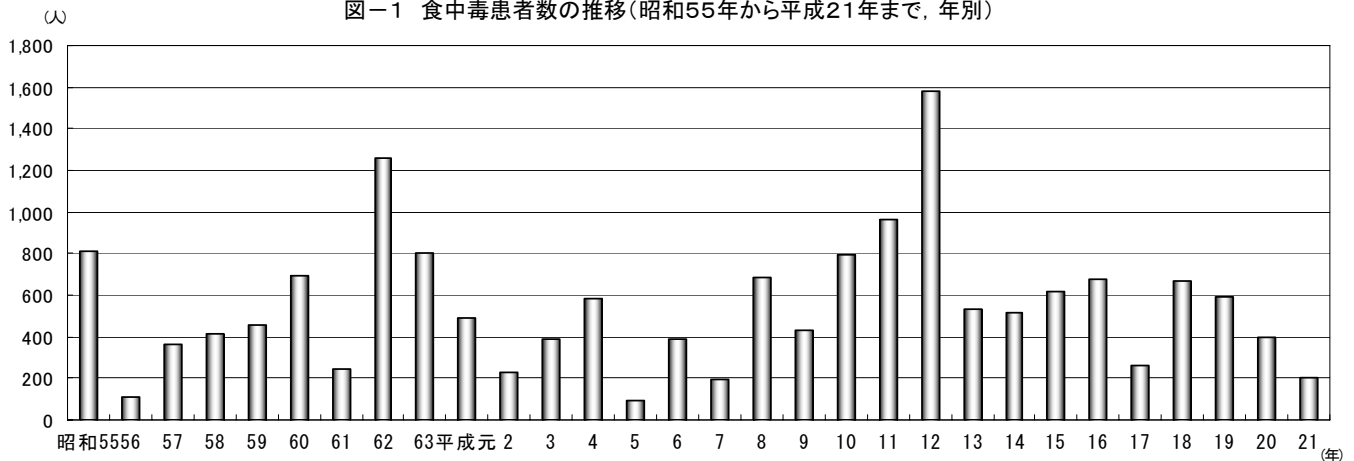
大阪管区気象台の発表（速報値）によると、近畿地方は、今年（平成 23(2011)年）、5 月 26 日ごろに梅雨入りしたとみられています。これは、平年より 12 日早く、昭和 26（1951）年以降では 2 番目に早くなっています。

さて、梅雨といえば、雨が続くだけではなく、湿度や温度が高くなり、食品が傷みやすくなる時期でもあります。そこで、厚生労働省の「食中毒統計」から、京都市における食中毒の状況をご紹介します。

### ○患者数の推移

まず、京都市における、年ごとの食中毒患者数をみます。昭和 55(1980)年以降で最も多かったのは、平成 12(2000)年の 1583 人で、飲食店等において、患者数が 100 人を超える食中毒が 4 件発生しました。次いで、昭和 62(1987)年の 1256 人、平成 11(1999)年の 960 人の順となっています。逆に、最も少なかったのは、平成 5(1993)年の 90 人でした。次いで、昭和 56(1981)年の 107 人、平成 7(1995)年の 195 人の順となっています。

図-1 食中毒患者数の推移(昭和55年から平成21年まで、年別)



### ○月別の平均発生件数

次に、平成 12(2000)年から平成 21(2009)年までの、食中毒の月別平均発生件数をみます。発生件数は、1つの原因によって発生した食中毒事件を1件と数えるもので、例えば、ある料理を食べた食中毒になられた方がお1人でも、100人でも、同じように1件と数えます。

この10年間の平均では、6月の2.0件が最も多く、次いで5月の1.9件、8月の1.7件の順となっています。

また、食中毒といえば、特定の時期に発生するイメージをお持ちの方もいらっしゃるかもしれませんが、季節を問わず、1年中発生していることがわかります。

図-2 食中毒の月別平均発生件数(平成12年から平成21年まで)

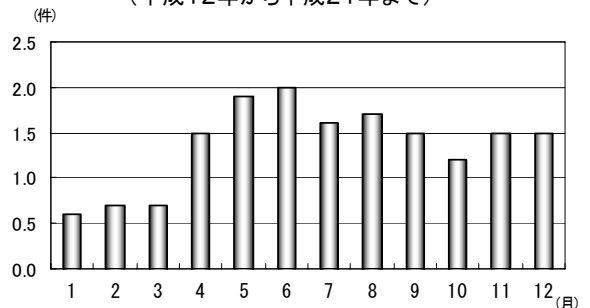
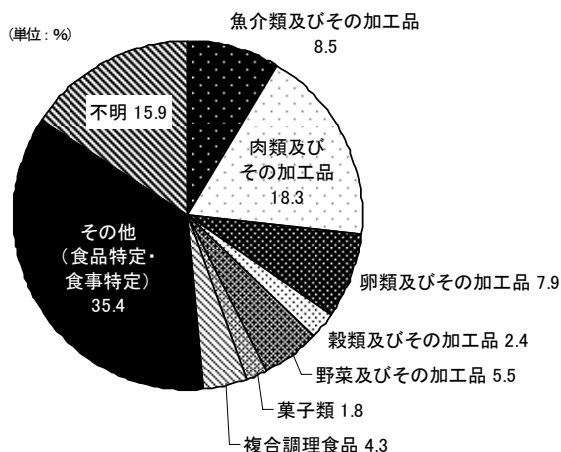


図-3 原因食品別の食中毒発生割合(平成12年から平成21年まで)



### ○原因食品別の発生件数

最後に、平成 12(2000)年から平成 21(2009)年までの食中毒の発生件数を、原因食品別にみます。

この10年間に発生した食中毒164件をみると、「その他(食品特定・食事特定)」が58件(全体に占める割合は35.4%)で最も多くなりました。うち、「食事特定」は、57件で、患者数は2103人でした。次いで、「肉類及びその加工品」が30件(同18.3%)で、患者数は371人、「魚介類及びその加工品」が14件(同8.5%)で、患者数は368人となりました。「不明」は除きます。

なお、この間に、京都市において、食中毒で亡くなられた方はいらっしゃいませんでしたが、全国では57の方が亡くなっています。そのうち、最も多いのは、「魚介類及びその加工品」の中の「ふぐ」によるもので23人、次いで、「食事特定」による14人、「野菜及びその加工品」の中の「きのこ類」による10人の順でした。